

126 グラン・モランを描いた佐伯祐三（2022年9月1日）

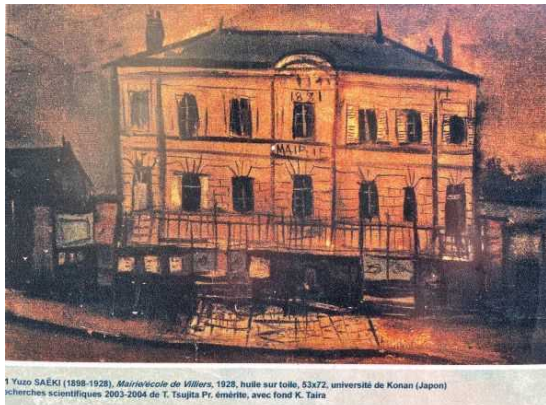
パリから東へ50キロほど行くと、多くの画家が愛したグラン・モラン川流域ののどかな景色が広がります。ヴィリエ=シュル=モランやサン=ジェルマン=シュル=モランには、グラン・モラン川流域の風景に魅了された芸術家や彼らが描いた絵を紹介するパネルが立てられており、アート散策を楽しむことができます。このパネルの中で、佐伯祐三（1898-1928）がこの場所を描いた作品も紹介されています。

佐伯祐三は、東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業後、1924（大正13）年にパリへ来ました。フォービズムの画家であったモーリス・ド・ヴラマンク（1876-1958）と出会い、ヴラマンクの影響を強く受けました。佐伯が描いた風景画は、モーリス・ユトリロ（1883-1955）の影響も受けていると言われています。佐伯は、パリに長く滞在することを望んだものの体調が優れず、1926（大正15）年に日本へ帰国しました。フランス滞在を強く望んだ佐伯は、1927（昭和2）年夏に再び渡仏しました。しかし、1928（昭和3）年春頃から再び肉体的にも精神的にも衰弱し、その年の8月に30歳の若さで、フランスで生涯を終えました。

佐伯が描いた風景は、現在でも残っています。彼の作品『モランの寺』（写真左下）はサン=ジェルマン=シュル=モランにあるサン=ジェルマン教会をモデルにしています。また、もう一つの作品である『ヴィリエの市役所』（写真は『モランの寺』の下）は、ヴィリエ=シュル=モランの市役所を描いたものです。市役所の建物は新しくなっていますが、現在も当時と同じ場所にあります。1928年2月にヴィリエ=シュル=モランに滞在した後に佐伯は体調が悪化したので、これらは彼がパリ以外の場所で描いた最後の作品かもしれません。



## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



佐伯は、画家として活動したわずか6年のうち半分をフランスで過ごしました。グラン・モランでは、一世紀前に佐伯が残した絵画を通して、現在とあまり変わらない当時の様子を知ることができます。川の流れと同じように、グラン・モランでは時もゆっくりと流れているように感じます。

佐伯は結婚後、現在の東京都新宿区に住居兼アトリエを構え、日本にいた間はそこで生活しました。アトリエ部分が、現在は佐伯祐三アトリエ記念館として一般公開されています。短かった佐伯の人生ですが、日本とフランスに彼の足跡を今に伝える場所が残されています。

